

講演2

方言で安心・安全 ―医療・看護・福祉と方言―

弘前学院大学文学部教授 今村 かほる

1. 今、なぜ方言なのか？

共通語化したと言われて久しい世の中で、今、なぜ方言が問題となるのか？と考える人も多いことだろう。それほどに世の中は共通語化し、方言の出番は少ないともいえる。現代社会という文脈で方言をとらえると、かつての方言撲滅や矯正といった方言蔑視とは別なものが見える。

それは、方言の価値の再評価や長寿・高齢化社会日本における方言ニーズであるといえる。

国語審議会20期答申（平成7年）の「方言の尊重」や平成15年の文化審議会国語分科会の「これからの時代に求められる国語力について」の審議でも方言は「地域における人々の共通の生活言語であり、またそれぞれの地域の文化の中核」であることや、「地域での意思疎通の円滑化と地域文化の特色の維持のためには、方言についても一定の対応が必要」とされたように方言の価値が再評価された。また、日本の高齢化率は27.3%と他の先進各国に比べても最も高い。その社会で生きる私たちには、世代間（主として高齢者と）の意思疎通の問題が生じている。他地域からの流入者に方言が通じないという従来の問題はもちろん、生え抜きの若年層であっても、生活環境そのものの異なり、地域理解・参加の機会の減少などから、時代背景・歴史の理解ができにくくなり方言が理解できない・使えなくなっている。そこに共通語化さらには英語教育といった条件も重なっている。そのため、「昔は犬の毛皮着でだ」と言われれば「犬の毛皮なんて着るはずがない。認知症だ。」と勝手に決め込んだり、「じゃんじ<匙>け<くれ>」と言われていても匙がスプーンのことだと気づかず対応できないなどの問題が生じている。さらには、「お腹痛くないですか？」のような否定疑問文に対する答えとして「はい」や「いいえ」が何を意味するのかも理解できずに取り違おうといった命の危険につながるような問題もある。さらには地域で働く外国人看護師・介護福祉士を含めたコミュニケーション問題にも発展しているという実態である。

2. 福祉と方言

医療に比べ、食事や排せつ、地域の伝統行事、タブーや価値観など、ありとあらゆることが対象となる。人間関係・信頼関係の構築がなされないと、安心して身を委ねられず仕事ができないと理解されているため、単なる情報のやり取りだけでなく、方言がコミュニケーションツールとして機能する分野であるといえる。超高齢社会である日本において、ますます注目される。

3. 医療・看護と方言

医療現場で問題となる方言差として3つのパターンがあげられる。①医療の現場で患者・利用者の用いる方言単語の理解：医療の現場で重要だと考えられる方言語彙は、感覚感情・症状・動作・身体部位・程度・頻度などがあげられる。医療面接において重要な「いつから・どこが・どのように」に関する患者の基本症状を理解するキーワードとなる。②医療者の用いる気づかれに

くい方言：医療者が方言と気づかずに使っている方言がある。それは方言が残存しやすいとされてきた動作語彙・感覚感情語彙・オノマトペに多く、共通語や幼児語・俗語に同音語や似た語形が存在する場合、特に気づかれにくい。③患者・利用者と医療・福祉関係者の用いる表現方法・コミュニケーション：方言ならではの地域性ともいべきものとして、表現方法や談話の型の違いや、コミュニケーションスタイルそのものに関わる問題がある。

4. 災害と方言

こうした問題は東日本大震災のような危機的状況時には顕著である。被災地の医療現場において「いつから・どこが・どんなふう」にといった方言が理解できれば正確に・早く情報伝達できるため「方言早見表」などが現場で作成された。被災地で活動した医療・福祉関係者へのアンケート調査によれば、約80%が「方言がわかると有益だ」と回答し、症状や患者さんの訴えがよくわかる、早く理解できる、被災者と医療者との関係・ラポールの構築に一定の機能を果たしていることを理由に挙げた。

5. 方言支援ツール <http://hougen-i.com/>

こうした研究成果から、支援者を方言で支援するツールとして「方言支援ツール」を開発してWeb上に公開している。その一つが「方言身体語彙図」であり、平山輝男他『現代日本語方言大辞典』（明治書院）の基礎語彙項目を基礎として47都道府県男女版をwebで公開した。避難所等でポスターのように貼り出して情報の伝達に使用したり、医師が手元に置いて確認したり、被災者が口に出して言えないことを指さしで示せるように工夫している。

6. 終わりに

石巻の方言で作られた「おらほのラジオ体操」は、仮設住宅で知らない人と暮らしたり、肉親を亡くした辛さ、絶望感などの理由から、生活全体が不活発になっている人が多い中で、最も参加者が多い行事として人気を得た。それは、自分たちのことば「石巻弁」だから集まれるという方言ならではの効果である。東日本大震災を経験し、これまで共通語で行われるのがあたりまえと考えられてきたコミュニケーションにおいて、方言ならではの効用・有益性が、被災者にも支援者にも認識されるようになった。それはつまり、人々が命という入れ物でしか受け継いでいけない文化・方言の価値や機能について再発見したことにあるのではないか。

【参考文献】

- 今村かほる（2010）「医療・福祉と方言」地域総合文化研究所編『地域学』8北方新社
今村かほる（2011）「医療と方言」『日本語学』30-2明治書院
今村かほる（2012）「東日本大震災と方言」地域総合文化研究所編『地域学』10北方新社
一三 今村かほる（2015）「医療福祉と方言—応用言語学として」『方言の研究』1ひつじ書房
今村かほる（2016）「方言と医療」井上史雄・木部暢子編『はじめて学ぶ方言学』ミネルヴァ書房
日高貢一郎（2002）「医療・福祉と方言学」日本方言研究会編『21世紀の方言学』国書刊行会
日高貢一郎（2007）「福祉社会と方言の役割」『シリーズ方言学3 方言の機能』岩波書店